

山田清二郎

プロレタリア文化の

青春像

A KATEN OCTUBRE 1921
LA SEMANTO

く蒔種

口知批と書カ行
一才 卷一才 年一才



5期 刊全

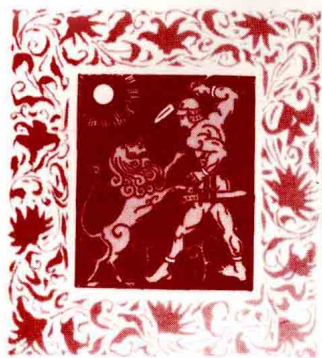
興新

49
期

號 刊

山田清三郎

ノロレタリア文化の青春像



山田 清三郎 (やまだ せいざぶろう)

1896年 京都市に生まれる

日本民主主義文学同盟員

戦前, 治安維持法違反で未決, 既決ふくめて投獄約五年

1940年~1945年, 中国東北(満州)生活

1945年~1950年, ソビエト抑留生活

主な著書

「プロレタリア文学史」上・下 (理論社), 「プロレタリア
文学風土記」(青木新書), 「近代日本農民文学史」上・下
(理論社), 「小説白鳥事件」全4巻 (東邦出版社), 「白
鳥事件研究」(白石書店), 「細菌戦軍事裁判」(真樹社)

プロレタリア文化の青春像

1983年2月15日 初版

定価1800円

著者 山田 清三郎

発行者 松宮 龍起

郵便番号 151 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-8

発行所 株式会社 新日本出版社

電話 東京(478) 3311 (代表)

振替番号 東京 3-1 3 6 8 1

印刷 享有堂印刷 製本 古賀製本

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

本書の内容の一部または全体を無断で複製複製(コピー)して配布することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

目次

一章 その草創期の中心となった『種蒔く人』をめぐる……… 7

1 小牧近江と山川亮 7

2 土崎版・東京版『種蒔く人』 10

3 思想家への呼びかけと発禁対策 14

4 『種蒔く人』の行動面 17

二章 労働文学の台頭にさかのぼり、『種蒔く人』『新興文学』の

終刊まで…………… 19

1 宮地嘉六、宮島資夫とのこと 19

2 『小説倶楽部』『新興文学』と立野信之、小林多喜二のこと 23

3 『種蒔く人』『新興文学』ゆかりの人びと 27

三章 『文芸戦線』の創刊、復刊、日本プロレタリア文芸聯盟の成立…………… 32

1 日本社会主義同盟とその創立前後のこと 32

2 「第四階級の芸術」論から詩誌『赤と黒』をめぐる 35

3 『文芸戦線』と日本プロレタリア文芸聯盟のこと 39

四章 日本プロレタリア文芸（芸術）聯盟をめぐる………44

1 共同印刷争議応援のプロ聯の活動 44

2 「無産者の夕」と育った人びと 48

3 マルクス主義芸術研究会のこと 55

五章 プロ聯成立以前にさかのぼって………57

1 雨雀、未明、吉蔵の「三人の会」と有島武郎のこと 57

2 「淫売婦」発表の頃の葉山嘉樹と「海に生くる人々」のこと 64

六章 『文芸戦線』をめぐる………69

1 壺井繁治と黒島伝治のこと 69

2 前衛座の創立と旗あげ公演、同研究所の開設 76

七章 三団体てい立の分裂時代へ………81

1 口火となった鹿地亘の一文 81

2 戦線分裂・抗争のなかで 89

八章 ナップ結成への前夜………93

1 蔵原惟人の登場 93

2 労芸の分裂、前衛芸術家同盟の結成 96

3 戦線の分裂とその收拾、統一へ 100

九章 補いと一九二七年の演劇……………104

1 小野宮吉、藤森成吉のこと……………104

2 プロレタリア劇場の北海道行と前衛座の新潟公演……………108

3 秋田雨雀の訪ソ送別公演と鹿地亘の「生きた新聞」への試み……………112

十章 ナップ結成への動きのなかで……………116

1 前衛芸術家同盟と前衛劇場のこと……………116

2 前芸機関誌『前衛』のこと……………123

十一章 日中無産階級文芸家交友のさきがけ……………129

1 小牧近江の述懐……………129

2 わたし（山田）の回想……………132

3 しのばれる二人の旅姿……………136

十二章 第一次普通選挙戦とナップの成立へ……………142

1 佐々木孝丸の回想……………142

2 わたしの回想……………147

3 ナップ結成にいたるまで……………149

十三章 プロレタリア美術の成立とその起源……………154

1 第一回プロレタリア美術大展開会……………154

2 第一回プロ美術展の反響 157

3 日本プロレタリア美術の史的軌跡とその起源 163

十四章

プロレタリア音楽運動とその始まり……………16

1 「くるめくわたち」から「赤旗の歌」 167

2
プロレタリア音楽の起源
172

3 昭和に入ってのプロレタリア音楽 176

十五章

『戦旗』初代編集長佐藤武夫とその夭折……………179

1 白テロ犠牲者追悼特集のなかで 179

2 佐藤武夫をしのぶその詩と『戦旗』創刊号の編輯後記 185

十六章

書きとめられた三・一五事件……………191

1
三・一五事件をめぐって
191

2 中野重治の「春さきの風」
194

3 小林多喜二の「一九二八年三月十五日」 200

4 無名の読者の投稿詩 203

十七章

国際文化研究所とその業績……………204

1 プロレタリア文化運動と蔵原惟人

2 国際文化研究所と蔵原惟人 207

3 雑誌『国際文化』のこと
209

4 『国際文化』につくした人々 214

十八章 ナップ以前のプロレタリア詩……………218

1 先駆となった民衆詩派の詩 218

2 『種詩く人』のプロレタリア詩 220

3 『文芸戦線』掲載のものから 221

4 『プロレタリア芸術』所載のものから 225

5 『前衛』に発表のものから 229

十九章 プロレタリア児童文学の成立から発達へ……………232

1 『無産者新聞』の「コドモのせかい」 232

2 『文芸戦線』の「小さい同志」欄 236

3 『前衛』と『プロレタリア芸術』の児童文学 242

二十章 プロレタリア映画の芽生えから「プロキノ」の創立とその活動……………247

1 プロレタリア映画の芽生えと佐々元十のこと 247

2 「プロキノ」の創立とその活動 252

二十一章 小林多喜二の「蟹工船」と多喜二の生涯……………260

1 小林多喜二の「蟹工船」と不敬罪のこと 260

2 多喜二成長の軌跡 267

二十二章	徳永直の「太陽のない街」と「能率委員会」のこと……………	273
1	徳永直と林房雄のかかわりあい……………	273
2	「太陽のない街」と「能率委員会」……………	274
二十三章	『戦旗』の発売禁止対策……………	280
1	製本屋も分散して……………	280
2	窮余の発禁対策……………	281
二十四章	初の獄中体験と獄内デモ……………	283
1	おぼえた独房の壁信号……………	283
2	その夜の獄内デモとその翌日……………	285
二十五章	プロレタリア文化運動の全線的展開・コップの時代……………	286
1	競って生まれ出たプロレタリア文化各団体とコップの創立……………	286
2	コップの創立、ナップの解体・文化運動の全線的展開の高揚へ……………	292
	あとがき……………	301
	索引……………	301

一章 その草創期の中心となった『種蒔く人』をめぐる

1 小牧近江と山川亮

プロレタリア文化の青春像といえは、私はやはりまずその草創期をみちびいた『種蒔く人』をめぐる、語らねばならない。

種蒔き車（民謡）

種蒔き車を

引き出して、

黒種、赤種、ふり散らせ。

胸の中から

泌み出した、

悩みは苦の種、生の種、

辛い、この生の

血のしづく。

生えろ、血の種、赤い種、
燃えろ、苦の種、黒い種。

街には暑い日が燃える、
胸には真赤な血がうめく。

一九二一年（大正十）十月三日付発行『種蒔く人』第一年第一巻第一号には、当時の民衆詩派の中心詩人福田正夫（1889-1956）のこの詩が掲載されていた。『種蒔く人』の同人の一人佐々木孝丸（仏文学者、俳優、演出家、1888-）は、後年その著「風雪新劇志」（一九五九 現代社）のなかで、「私たちは一杯飲むと、この詩に節をつけて、大声で歌って歩いた。黒種はアナキズム、赤種はボルシェヴィズム（コンミュニズム）で、いわゆる『アナ・ボル』同居時代であった」と述懐しているように、この「種蒔き車」は、まさしく『種蒔く人』同人の思想と心情、心意気といったものをいみじくも吐露し、うたったものにほかならなかった。

その『種蒔く人』といえは、私はやはり小牧近江（1884-1978）をまっ先きに、思い浮かべないではいられない。

この小牧が亡くなったとき、一九七八年十月三十日付の日本共産党中央機関紙『赤旗』は、『種蒔く人』の小牧近江氏死去』の見出しで、つぎのように報じていたので、ここに引用させてもらうことにする。

仏文学者の小牧近江氏（こまき・おおみ、本名・近江谷駒Ⅱとおみや・こまき）は二十九日午前一時四十五分、脳血栓（せん）のため鎌倉市の聖テレジオ病院で死去。八十四歳。秋田県出身。告別式は十一月二日午後二時から北鎌倉の円覚寺で。自宅は鎌倉市稲村ヶ崎三の三の八。喪主は長男、左馬之介（さまでのすけ）氏。

一九一〇年（明治四十三年）、十六歳の時暁星中学を中退して父と渡仏、一八年パリ法科大学を卒業、当時のフランスの進歩的な文化運動であったクラルテ運動に参加しました。同一九年帰国、同二年に郷里の秋田県土崎港と東京で相ついで『種蒔（ま）く人』を創刊、日本にはじめて第三インターナショナルを紹介したり、プロレタリア文学運動をつくり出す出発期で重要な役割を果たしました。その後、国民新聞を経て、戦後は五一年に中央労働学院長、ひきつづき七一年まで法政大社会学部長。著書に「ふらんす大革命」「フランス革命夜話」「ある現代史」「種蒔くひとびと」など。訳書に「地獄」「クラルテ」（バルビュス）、「小さな町」（フィリップ）など

があります。

最近まで住民運動でも活躍。鎌倉の革新市政の誕生とその継承・発展のためにも力をつくしました。

この住民運動のことは私には初耳だったが、このあと私もとめられて、「小牧近江をしのぶ」と題して、同年十一月七日付『赤旗』文化欄に、つぎの思い出を寄せたのだった。

『種蒔く人』の創刊者であり、主宰者だった小牧近江が逝ってしまった。惜しい。『種蒔く人』の同人につらなつた一人として、何とも悲しく、またさびしい。

小牧近江といえば、私は何よりも、彼が日本で、「インターナショナル歌」のうたごえをあげる最初の発案者であり、またその実践の先頭に立ったことが思い出される。

その著『ある現代史』（法政大学出版局刊）のなかで小牧自身が語っているように、それはまだいつ崩壊するかもしれないとされていた、世界最初の社会主義の国ソビエト同盟を誕生させた、ロシア革命五周年記念日に前にして、この日を祝福したいとする、みずから「インターナショナルリスト」を以て任ずる彼の考えにでたものだった。しかし、『種蒔く人』の種蒔き社が表にたつては、会場を手に入れることもむづかしく、また警察が集会を許

しそもなかった。そこで、私の編集で、当時創刊号が発行されたばかりの『新興文学』の宣伝ということで、私が会場の借り手と所轄署への届出人ともなつて、その日、一九二二年十一月七日、牛込区神楽坂牛込会館で、午後六時から、「新興芸術講演会」なるものを開催することに、事を運んだ。

「中止々々で騒然たる演説会／其筋の『悪い記念日』に／開会前に早くも検束」なる見出しで、翌朝の朝日新聞は大きく報道したが、司会者をやるはずだった私も、会場の手前で、「早くも検束」された一人だったのである。

しかし、講演会はいちから、『ある現代史』での追憶によると、小牧は、「演壇に立つと開口一番『クララテ！クララテとは光である』とぎり出し、『今日十一月七日はソビエト革命の』で中止を食ひ、待機中の警官に引つ立てられながら『インターナショナル』と叫んで手をふると、会場の隅から『インターナショナルわれらのもの』の合唱の嵐がおこったと語られている。

「合唱の嵐」は誇張にしても、こうしてこの夜、働くもの、飢えたるものの国際的連帯をうたった『インターナショナル歌』の大衆の場での第一声があげられた。その音頭をとった小牧、うたった市川正一（一九四五年三月十五日宮城刑務所で獄死）、青野季吉らも検束されて

きて、私は神楽坂署の留置場で、彼らにきいて興奮したものであった。

その小牧近江も亡くなってしまった。

右市川正一（1889～1945）は、その年七月十五日、非法に結成された日本共産党創立者の一人であったが、そのときは私は無産階級社の市川としか知らなかったし、知るはずもなかった。なおこの夜神楽坂署に検束されたものは、留置場全房で総立ちになるほどの大勢で、私の知った顔がおには、つぎの人たちが含まれていた。

高津正道（社会主義団体曉民会主宰、1883～1974、戦後社会党衆議院議員当選四回）、岡本潤（詩人『シムーン』同人、後壺井繁治、川崎長太郎らと詩誌『赤と黒』——一九二三・一——一九二四・六全四冊——を創刊、1901～1978）、佐野袈裟美（『シムーン』主宰、1886～1945）、内藤辰雄（労働者作家、『黒煙』〔一九一九・三——一九二〇・二全十冊〕同人、1893～？）、平沢計七（労働運動家、労働劇団創設者、労働者作家、号紫魂、1889～1933、関東大震災下、亀戸署で軍隊に銃殺される）。

『新興文学』第一巻第二号（一九二二・十二）は、——山田生——と私の署名した巻末の「編集室より」で、この講演会について、「当日は第三インターナショナルの日であり、講演者の顔触れが顔触れだったので、聴衆の興味をそそる

こと一方ならず、開会前既に満員で、臨場の警官のために、入場を謝絶されたものも数知れなかった。秋田雨雀、小牧近江、西宮藤朝、佐野袈裟美、津田光造、内藤辰雄、井東憲、新島栄治諸氏の講演を終って、九時熱狂裡に閉会した。尚ほ当夜の光景は、当時、東京、大阪及全国有力新聞が筆を揃へて一斉に報道した通りである」と書いたが、検閲への考慮から、検束騒ぎには触れるのは避けていた。

この講演会の話をも、私にもってきたのは『種蒔く人』同人の一人の山川亮(1886~1957)であった。山川は福井県の生まれ、本名亮蔵、別号鳳逸平。與謝野晶子らの『明星』の歌人山川登美子の実弟。早大英文科中退、新聞記者などをやり、『種蒔く人』の同人として草創期のプロレタリア文学運動に参加、短編集『決闘』(一九二五・六 四紅社)、長編小説『世紀の仮面』(一九二九・三 改造社)などがある。晩年は茨城県の磯原に住み、地方文化の推進に貢献、共産党機関紙『アカハタ』の分局長をつとめ、倒れたのも『アカハタ』配付中のことであった。

この山川亮が逝いて二十年、一九七七年十月、福井県下の総合文化誌、ゆきのした文化協会発行の「ゆきのした」二二一号は、「山川亮蔵」の特集を行った。そして私もとめられて、故人との思い出をなつかしみ、書いた次第であった。

2 土崎版・東京版『種蒔く人』

さて『種蒔く人』である。編集兼発行人、東京市赤坂区青山北町一丁目八番地近江谷駒、発行所、同上種蒔き社、印刷所、秋田県南秋田郡土崎港清水町八九寺内林治のいわゆる土崎版『種蒔く人』(表紙とも一八頁)の第一巻第一号は、一九二一年(大正十)二月二十五日発行で世にあらわれた。そして同年四月十七日発行の第三冊で終刊となった。この第一次『種蒔く人』は、フランスの農民の子の画家ミレー(1834~1885)の種蒔く農民像と、彼の「自分は農民のなかの農民だ、自分の綱領は労働である」という言葉で表紙を飾り、フランスで育ち、フランスから帰った小牧近江その人の体臭を、さながらに匂わせていた。

土崎版『種蒔く人』は、誌上にその名は記されてはいなかったが、小牧と同郷の今野賢三(1893~1960)、金子洋文(1894)、畠山松治郎のほか、前記山川亮を同人としていた。この土崎版『種蒔く人』について小牧近江は「ある現代史」のなかで、つぎのように語っていた。

……東京へ帰って、外務省に勤めるようになると、金子洋文から電話があり、会って話しをしているうちに意気投合、雑誌を出すことになりました。これが土崎版

『種蒔く人』でした。予算は二十三円。部数は二〇〇部でした。その位のことなら、私の月給でまかないました。

題名をどうしようかと洋文と相談しましたが、フランスに多い、少しアナ系の臭味がありました。『種蒔く人』にきめました。……

土崎版は、三号でストップしました。おもに農村や地方の進歩的文化人にくばりました。片田舎とはいえ、秋田にも、インテリ層、ことに文学愛好者が、あの町、この村というように、散在していたものです。それがいつの間にか小作人運動に糾合される^{いん}礎になりました。

土崎版『種蒔く人』は、表面文芸雑誌で、コミンテルンの紹介をしただけで終わりました。

さて東京版、第二次『種蒔く人』である。これが世に出るいきさつについては、小牧近江は「ある現代史」で、佐々木孝丸は「風雪新劇志」で、それぞれ語っているが、これを総合すると、それは一九二一年（大正十）のメーデーが媒介となったもので、あきらかに生きた歴史によってとりもたれたものであったことがいみじくも注目される。

一九二一年のメーデー、それは日本では、第二回のメーデーであった。第一回のメーデーはその前年の一九二〇年であったが、これは示威行進はなく、上野公園の両大師前

の広場での屋外集会だけで終わった。二回目は芝浦の広場で集会、集会終わって神田橋経由、上野公園まで示威行進が行われたのだ。

佐々木孝丸は、劇作家・童話作家の秋田雨雀（1893～1963）、画家・民俗学者の橋浦泰雄（1888～1979）とたずさえてその行進に参加した。危く検束されかけて和服の片袖を破られたが、うまく山の上に駆け上った佐々木は、そこに小牧近江、村松正俊（1895～1987）の姿を見出して意外の感に打たれた。佐々木は、小牧も村松も、高踏的な貴族趣味の青年紳士で、メーデーなどに参加するなどとは思ってもうけなかったからだ。

この出会いで、その日佐々木は小牧に誘われて、青山のその家に行き、小牧からもらった社会主義に関する啓蒙的なフランス語の小冊子数冊をふところに入れ、「ひどく張り詰めた、昂奮した気持を抱いて」帰ったのであったが、これが佐々木が再刊『種蒔く人』の同人に小牧から誘われる下地となったわけであった。

再刊『種蒔く人』は、土崎版『種蒔く人』が、三号雑誌で終刊となった同じ年（一九二一）十月三日発行で、第一年第一巻第一号が出されたが、これは本文五六頁に増大されていた。この「東京版『種蒔く人』を出すまで」について、「ある現代史」で小牧はつぎのように述懐している。

外務省第二課長は松岡洋右さんで、私の仕事は、おもに、フランスの出版物を読み、時には紹介したり、この国のジャーナリストが来日した時、案内をしたりすることでした。大正十年（一九二一年）詩人ポール・クロードルが来日した時には、フランス文学に興味を持っている者たちが集り、諸大学の学生が中心となり歓迎会を組織しました。そういう機会に、私はいくたりかの文芸家たちと知り合いになったのです。

クロードルが来日する直前、「ヴェルレーヌ祭」（一九二一年）を上野精養軒で催しました。この時もフランス文学に関心をもつ人びとが集り、私は川路柳虹などの詩人たちと知り合いになりました。おそらく、これが「何々祭」と名付けるフェスティバルの最初のものではなかったでしょうか。十六歳かの少女水谷八重子さんが、出演しております。

そのうち、こうして知り合った文芸家達の中の骨ある何人かの間に、「雑誌をやるうじやないか」という話がありました。「実は、「種蒔く人」という雑誌が三号でストップしている」が、と持ちかけると、「それを続けてやるうじやないか」「よからう」というわけで、東京版「種蒔く人」の発刊がきました。

この小牧の回想のなかのクロードル（1868～1925）とい

うのは、フランスの外交官で詩人、劇作家で、一九二一年から二七年まで、駐日大使を勤めた。そして小牧とは、親交があったのである。

小牧が最初に具体的な相談をもちかけた仲間は、村松正俊と佐々木孝丸であった。村松正俊は東京帝大文学部卒業、同大学院にも学ぶ。当時は慶応義塾でギリシャ語の講師をしていたが、新進の文芸評論家として知られていた。

小牧を主宰者に、今野賢三、金子洋文の土崎組、村松正俊、佐々木孝丸、山川亮、柳瀬正夢（画家、本名正、別名夏川八郎、1900～1965、東京新宿駅で米軍焼夷弾の破片で絶命）を同人とする（後に平林初之輔、津田光造、松本弘二、青野季吉、前田河広一郎、中西伊之助、上野虎雄、佐野袈裟美、武藤直治、山田清三郎が順次同人となる）。東京版『種蒔く人』は、その創刊までに小牧は、左記内外の進歩的作家、詩人、思想家を「執筆家」として、誌上にその名を掲げる承諾を得ていた。

秋田雨雀、馬場孤蝶、エドワード・カーペンター、江口渙、藤井真澄、福田正夫、ポール・ジル、林俊衛、石川三四郎、加藤一夫、宮地嘉六、百田宗治、ポール・クリュ、富田碎花、吉江喬松、有島武郎、アンリ・バルビュス、クリスチャン・コルネリセン、ワシリイ・エロシェンコ、藤森成吉、アナトル・フランス、長谷川如是

閑、平林初之輔、神近市子、川路柳虹、宮島賢夫、小川未明、白鳥省吾、山川菊栄。

まさに壮観というべきであった。そして「ある現代史」によると、雑誌発行の資金は皆で手分けをして集めた。佐々木孝丸の師匠格秋田雨雀に相談ののってもらい、有島武郎(1878~1923)の個人雑誌『泉』(一九二二・十一~一九二三・六)の発行者叢文閣主人足助素一と会うことになった。そして足助を通して有島武郎と接近することができた。叢文閣では、まずフランスの進歩的反戦作家アンリ・バルビュス(1873~1935)の代表作の一つ「クラルテ」の訳本を出すことになり、翻訳料は前払いにすることになった。で小牧は「地獄に仏」の思いであった。

また佐々木孝丸の口利きで、新宿で知られる中村屋の主婦相馬黒光が百円——佐々木の「風雪新劇志」によると二百円——出してくれた。こうして「やれやれ、これで印刷費の目鼻がついた」というわけであった。

ところで佐々木と中村屋・黒光夫人とのかわりあいであるが、このことについて佐々木は「風雪新劇志」でつぎのように回想している。

その前年(大正九年)の春に、秋田さんは関西方面へ講演に招かれ、その途次、京都で「カメレオンの会」という脚本朗読の会に列席していて、帰京後、いささか昂

奮した面持でそのときの模様を私たちに話して聞かせた。新村出博士や成瀬無極氏、それに、そのころ同志社大学でイブセンの連続講義をしていた有島武郎さんなどという、錚々たる顔触れで、そのときには、チェホフの「犬」と秋田さんの「二十一房」とが朗読されたそうだ。その話に刺激されて、私たちも脚本朗読会をやらうということになり、相馬黒光夫人の好意で、毎月一度か二度、中村屋の二階へ集ることになった。そして会の名を秋田さんの代表作「土」三部作にちなんで「土の会」とした。

その会で、私たちは、月々の雑誌に発表される創作戯曲を、各々パートをもって朗読しながら研究したり、適当な創作戯曲のないときには、イブセン、チェホフ、ゴーリなどをテキストに用いたりした。秋田さんを中心に佐藤青夜、能島武文(当時早大の学生で、後若干の戯曲も書き、芝居の実験面での仕事もしていたが、現在は、探偵小説の翻訳者として、時々名前を見かける)それに私、とこれだけが外部から中村屋に集まるおきまりのメンバーで、それに中村屋の主婦黒光夫人、当時自由学園の学生だった娘の千賀子さんが加わり、これら常連の外に、誰かの縁故で、毎回二三人ずつは臨時の参加者があり、神近市子さんなども時々顔を見せて朗読の仲間

に加わった。聴き手はいつも中村屋主人の相馬愛蔵氏と、盲詩人エロシエンコで、朗読が終ると、中村屋主人はとぼけたような駄洒落をとばしてひやかしたり、エロシエンコは真つ向から辛辣な批評をあげせかけてきたりした。

この盲詩人エロシエンコは、相馬愛蔵夫妻の世話になって、当時日本に滞留していたのであった。

この「土の会」に参加する一方、佐々木は吉江喬松（別号孤雁、1880~1900）を中心に結成されていた「フランス同好会」に入った。そしてそこで彼ははじめて小牧近江、村松正俊と知りあった。こうして佐々木は東京版『種蒔く人』の同人に加わることになったのであった。

このようにして、東京版『種蒔く人』のスタートの準備はととのった。さてその目標であった。小牧は村松、佐々木らと額を合せて相談したが、結局当初小牧が意図したコミンテルン——第三インターナショナルの支持を、正面から打ち出さないことにした。それというのも、当時村松も佐々木も、どちらかといえばアナーキスト型であり、当時の思想運動の傾向は、アナルコ・サンジカリズムでなければ、ブルジョア・デモクラシーで、ボルシェヴィズムに組するものはまだ少数だったからだ、と、「ある現代史」のなかで小牧は振り返っている。

3 思想家への呼びかけと発禁対策

およそそのようにして世に出ることになった東京版『種蒔く人』は、表紙に「行動と批判」なる標語をかかげ、前記「執筆家」の名をつらねた表紙の裏面に、つぎの宣言をかかげていた。

嘗て人間は神を造った。今や人間は神を殺した。造られたものの運命は知るべきである。

現代に神はゐない。しかも神の変形はいたるところに充満する。神は殺されるべきである。殺すものは僕たちである。是認するものは敵である。二つの陣営が相対するこの状態の続く限り人間は人間の敵である。この間に妥協の道はない。然りか否である。真理か否である。真理は絶対的である。故に僕たちは他人のいはいない真理をいふ。人間は人間に対して狼である。国土と人種とはその間ふところでない。真理の光の下に、結合と分離とが生ずる。

見よ。僕たちは現代の真理のために戦ふ。僕たちは生活の主である。生活を否定するものは遂に現代の人間でない。僕たちは生活のために革命の真理を擁護する。種蒔く人はここに於て起つ——世界の同志と共に！